

氏名(国籍)	朴桂弘(韓国)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第52号
学位授与年月日	昭和56年2月28日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	韓国における堂祭の研究—日本の村祭との比較研究のために—
主査	筑波大学教授 文学博士 直江 廣 治
副査	筑波大学教授 井上 辰 雄
副査	筑波大学教授 文学博士 北見 俊 夫

## 論 文 の 要 旨

本論文は、韓国の村落において、村民こぞって挙行する村祭りたる「堂祭」の実態を綿密に調査し、その類型・構造・機能・変容などの諸点を検討した結果に基づき、日本の村祭りとの比較にまで及んだもので、400字詰原稿用紙1417枚から成る。

まず「序説」において、堂祭の概念を定義し、ついで堂祭の研究史を回顧し、先行業績を詳細に分析し批判を試み、その結果多くの重要課題が未解決のまま残されているとして、その克服のための方法と資料・課題を述べている。

第1篇「堂祭の類型と事例」は、資料篇とでも称すべき部分で、なるべく多くの堂祭事例を提示すべく努め、堂祭の名称(第1章)、祭堂の位置と形態(第2章)、祭神の神体と神格(第3章)、祭儀の構造(第4章)など、4章にわたってそれぞれ資料を類型化して叙述し、比較研究に備えている。著者が提示している堂祭事例は117例で、韓国全地域にわたっている。

第2篇「堂祭の民俗学的研究」では、前篇において提示した117事例を5章14節に区分してさまざまな角度から分析を試み、日本の村祭りとの比較を試みている。まず第1章では、117事例を資料化して、堂祭を構成する諸要素についてそれぞれ民俗分布図を作成している。第2章「祭りの名称と祭堂」では、祭りの名称と目的、祭堂の位置、祭堂の標識と形態について考察している。祭堂の位置として最も古形に属するのは山中の祭堂とりわけ山頂の祭堂であると指摘し、また祭堂の標識としては神樹・神柱が古形であろうと推定する。第3章「神体と神格」では、神体としては樹木・木竿・岩石・累石などの自然神体が古い形で、それがしだいに吉紙・神図・神像・神牌などの人工

神体へと変形し、また複合したと見る。神格に関しては、自然神の代表的なものは山神であり、主に農作の豊凶を支配する神として信仰されている。人格神の代表は開拓神で、元来はその後裔たちが祀る氏族神であったが、しだいに地域神として発展する傾向をとった。第4章「堂祭の構造と機能」では、堂祭の儀式構造・祭日・司祭者・供物と費用・禁忌・祭りの形式・堂祭の機能と意義などの諸点が考察されている。堂祭の儀式は複合構造をとったものが多く、それは集団と集団の混合、住民の移動、文化の複合村落の拡大と生業の分化などによる祭儀の混合によるものと見るが、いずれの構造においても山神祭が基本となっている点を指摘している。司祭者については、近來まで巫人の役割りが強大であったが、現在では祭官・祭主・堂主などと呼ばれる臨時の司祭者が村民の協議によって選任される例が多い。しかし時には降神による指名、巫人の卜者による指名も見られる。神への供物は「飲福」と称して人々が分けて食べるが、これは神人の共食であり、日本の直会の儀礼と同じである。司祭者に選ばれると、嚴重な種々の禁忌に服さなければならないが、祭りの期間中は村人もさまざまな禁忌を守ることが要求される。堂祭の形式は、巫俗的、儒教的、仏教的に大別できるが、現行堂祭の大部分は儒教形式か儒教・巫俗複合形式である。第5章「韓・日民間信仰の基本構造比較」では、両国の民間信仰に現われる祭神の表象と祭場の標識について考察を試みている。韓国の堂祭と日本の村祭りとの間には、多くの類似性ないし同質性が含まれている。堂祭の祭神のうち人格神は、日本の「村氏神」と同じく、血縁的な氏族神が地域神に発展したものである。神の表象においても、韓・日双方における祭神は、いずれも垂直降臨という形を共通にしている。また両民族において、祭場標識の古型は山頂の樹木であり、ここにも垂直的降臨観がうかがえる。また祭りに際して両民族ともに紙や布類を用いるが、これは祭りが行われる真夜中に、祭神をして祭場の位置を確認せしめ、そこに降臨させるための目じるしであったと見る。さらに祭りに際して火が用いられることも、韓・日両国に共通しており、それは祭場の表示を強化し、不浄を清めるための積極的な手段と考えられる。以上のように、韓・日両民族信仰の基本構造には同質的な要素が少なくない。このような同質的要素は両民族の交流・接触による文化的現象と考える。

## 審 査 の 要 旨

韓国民俗学が学問的体系を整え出したのは比較的新しく、今日なお形成の途上にあるということもできる。それだけに関係者は熱意をもって、その展開に立ち向いつゝあり、筆者もその有力な1人である。本論文もそうした努力を傾けた力作である。筆者が韓国全域にわたる精緻な実態調査によって提示している数多くの堂祭資料は、それ自体きわめて貴重なもので、学界に貢献するところ大なるものがある。加えて堂祭に関して初めて総合的・体系的把握を試みた本論文には、幾多の独創的見解が随所に見られ、高く評価される。また韓国の堂祭と日本の村祭りとの間に見られる多くの類似性ないし同質性の指摘は貴重である。もっとも資料の分析や立証の態度に若干慎重さを欠く箇所があったり、用語にやや不適當な表現が見られるなど不満な点が残るが、本論文は総体として

韓国堂祭研究のレベルを遙かに凌いでいるし、日本の村祭りとの比較考察に新しい視点とさまざまな問題を提示した功績は、きわめて大きいと認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。